

記念講演

『雪舟と人物画』

講師 京都国立博物館学芸課長 金澤 弘（かなざわ ひろし）

昭和 10 年大阪府出身。

慶應義塾大学文学部哲学科（美学美術史）卒。

日本絵画史専攻。現在 京都国立博物館学芸課長文部技官

著書 「中世障壁画」「初期水墨画」「古美術ガイド」「室町時代の水墨画」など多数。

司会

皆様、大変お待たせいたしました。

ただいまより金澤弘先生の講演を始めさせていただきます。

金澤先生は、昭和 10 年に大阪府でお生まれになり、慶應義塾大学の文学部哲学科を卒業され、現在は京都国立博物館学芸課長として御活躍されておられます。また、著作活動では、中世障屏画、初期水墨画、室町時代の水墨画など多数執筆されておられます。

本日は、「雪舟と人物画」と題しましての御講演をいただくことになっております。どうぞ最後まで御静聴くださいますよう、お願い申し上げます。

それでは、金澤先生をお迎えしたいと思います。

金澤先生、よろしくお願いいいたします。（拍手）

金澤 弘（京都国立博物館学芸課長）

おはようございます。ただいま御紹介いただきました金澤でございます。

4月でしたか、益田の方がおいでになりまして、この話をお伺いしまして、雪舟サミットというものがあるんだと知りました。サミットという言葉は今はやりの言葉で、いろいろあるようでございますけれども、1人の画家の名前を、あるいはそれを記念してこういう会議というんでしょうか、かわわりというのが行われるというようなことは、これは恐らく世界的にも前代未聞のことだろうと思ひまして大変びっくりしたわけです。それだけ雪舟という画家、画人が意義のある人なんだなあ実感しました。

私自身、学生時代から雪舟に興味を持ちまして研究し、いろいろ書いたり、話をさせていただいたりしたわけですが、今回こちらの益田で、もとの領主の益田兼堯像の画幅が、これは今記念館に展示されておまして、ごらんになられたと思いますが、こちらの所蔵ということになりました。

それで、それに絡んで雪舟と肖像画というテーマでお話しさせていただきたいと思ったのですが、ちょっと材料不足で、それじゃあ人物画ということにさせていただきますかと言って、気軽にお引き受けしたわけです。それから考えてみますと、雪舟について書いたり、時々その話をさせていただいていますが、大体雪舟のとらえ方というのは、歴史的にも研究史的にも、もちろん私もそれに準じているわけですが、どう考えても山水画家雪舟というイメージが強いわけです。実はしまったなと、やっぱり雪舟と人物画というテ

ーマはちょっとまずかったなということの後で気がついたのですが、それでもこういう印刷物になってしまったんだからしょうがない。人物画ないしは雪舟の人物画の意義というようなことをひとつ改めて考えてみようと思って、それで今日どういう結論になりますか、ちょっと私も不確かなところがあるんですが、お話しさせていただこうと思っているわけです。

さっきも言いましたように、雪舟というのはとにかく山水画家であるということが定着しています。現在、日本の文化財行政で重要文化財とか国宝とかいう一種のランキングがありますが、雪舟の作品の中でいわゆる国宝に指定されている作品が5点ございまして、これが全部山水画なんです。年代順に申しますと、恐らく50歳代の後半か60歳の初めぐらいのころだと思われる「秋冬山水図」・・秋と冬の山水、それから67歳に山口の雲谷庵へ雪舟が定着して第2の人生を踏み出した、そのモニュメントになったろうと思われる「四季山水長巻」、これは現在は毛利報公会に保存されております。それからその次に、さっきの「秋冬山水図」もそうなんですが、「破墨山水図」、東京の国立博物館に保管されています。これは雪舟が、鎌倉から山口へ絵の修養にきておりました弟子の如水宗淵という、これも禅僧でありますけれども、宗淵に饑別の意味で与えたという「破墨山水図」という作品、76歳です。「破墨」というのは墨を破る、破る墨というふうに書くわけですが、印象派のような光の効果をもつ作品ですね。そして、最晩年の作品だと思われる非常に硬いタイプの縦型の「山水図」で、これは雪舟が亡くなってから、恐らく一、二年後に尋ねてきた禅僧である友人の牧松周省と了庵桂悟が上に賛を書いて、詩を書いて、雪舟を追悼している作品でございます。ですから、これは雪舟の最晩年の作品ということで86、7歳。それからもう一つは、私のおります京都の国立博物館に保管されております「天橋立図」です。実はこの画面の中に知恩寺の多宝塔という塔が描かれておまして、これの建立創建年代から1501年以降、ですから雪舟の82歳以降の作品だということになっています。しかも、それは現地へ行って描かれたんだということで、81、2歳の雪舟が丹後の宮津まで出かけたというのが定説ですが、私は実は・・これは今日のテーマから外れますので簡単に申し上げますが、むしろこの絵から受ける印象としては、そして雪舟の画風の展開ということを考えますと、山水長巻より前の62歳ごろに、少なくとも岐阜の正法寺というお寺までは足跡がたどれまして、そこで滞在をして、万里集九という友人と会合しているのが文献的に証明されるわけです。その往路、あるいは復路に天橋立へ寄ったんだろうと想像するわけです。ですから、「山水長巻」より少し前の時代、この5点の国宝の中では最初から2つ目の位置へ置きたいというふうに思っているわけです。

かくのごとくで、雪舟の画業を探る上で非常に重要な作品として5点の国宝の作品がいずれも山水図であるということが、とりもなおさず雪舟という人が山水画家であるということに自動的につながる、そういう解釈が現在もなされているということではないかと思うわけです。

そこで、あえて本日はむしろ人物画の方へこの雪舟の意義を、あるいは我々の意識をち

よっと人物に向けてみたいなというふうに思って、それが「益田兼尙像」を見ていただくときの参考になり、あるいはその兼尙像の価値を少しでも認識できればいいなというふうに思ってお話をさせていただくわけです。

山水画家であるこの雪舟という人は、御承知のように15世紀の後半を中心に活躍をした画僧であります。水墨画の歴史そのものは、雪舟が活躍する15世紀の後半よりは少なくとも100年ぐらいいさかのぼり得るわけです。その雪舟までの流れというのを非常に簡単に整理いたしますと、14世紀の初めから終わり、主として14世紀の中盤から後半までですけれども、つまり西暦でいいますと1300年代、それから日本年号でまいりますと、今NHKの大河ドラマでやっております足利尊氏のあの太平記のころから3代目の義満将軍が金閣寺をつくって南北朝が合体するというあの時代ですね。日本の歴史の中ではちょっと昔から閑却視されておって、あまり日の当たらなかつた時代ですね。実はその14世紀の後の3分の2ぐらいの、つまり南北朝の始まりごろから14世紀の終わりごろまでの間に日本の水墨画というのは中国から禅僧の往来とともに渡ってきて、そして日本の禅寺、京都、鎌倉を中心にした禅寺で非常に盛んに描かれるようになった。たくさん作品が残ってるんですが、ところがこの時代の水墨画、「初期水墨画」という言い方でひとつグルーピングをして、そういう言葉をつくり出したわけですが、いわゆる14世紀の水墨画というのは、残っております作品、あるいはその年代に生存しておった禅宗のお坊さんの語録という詩文集、記録が現在でも伝わっておりまして、その中にある水墨画に関する資料というのを丹念に見ていきますと、まず95%近くが人物画なんですね。いわゆる道釈人物画という、現在、余り有効な言葉ではありませんけれども、古い、もう少し前の時代では道釈画という言い方すらしたわけです。道釈画、あるいはそれにわかりやすく人物をつけて道釈人物画というわけですが、「道(どう)」は道教の「道」であり、あるいはいろんな意味での「道(みち)」、「道(どう)」ですね。それから、「釈」は御承知のように仏教のお釈迦さんの「釈」です。ですから、仏教なり、あるいは道教なり、一種の道(みち)に絡んだ、道(どう)というものに絡んだ人物ということなんです。禅宗というのは後発の宗派でありますから、在来のいろんな思想を包括して自分のところへ取り入れて版図を広げていくという一つの、初めからそういう意図を持っている。そういうスタイルを持っているわけですが、特に隠遁思想的な、道教的な人物、思想というのを非常にうまく取り入れているわけです。この道釈人物、つまりこの時代、14世紀に描かれた水墨画のほとんどがこの道釈人物画であったということは、とりもなおさず禅宗が中国から日本へ本格的に伝わってきて、そして版図を広げていく上に非常に有効な手段であって、絵画とこの文化と宗教というのが持ちつ持たれつの関係にあったということが言えるわけです。

随分、南北朝時代の水墨画というのが発掘されて、現在では相当の数が知られるようになっております。どういうものであるかと申しますと、禅宗的な解釈をされた仏画、つまりお釈迦様であったり観音様であったりするわけですが、お釈迦様というのはちゃんと台座の上にお座りになって端座しておる姿じゃなくて、ぼろぼろの服を着て、修業に疲れ果

てた姿であるとか、あるいは修業に疲れ果てて山の中からおりてきて世の中へ教えを広めていくという、山を下りてくる「出山の相」であったり、それから観音様も着飾った観音様じゃなくて、本当に清楚な白い衣を着た白衣の観音、「白衣観音」と言っておりますけれども、そういう新しい解釈をされた仏画、それから中国の禅宗の初祖である「達磨大師」であるとか、あるいは「布袋和尚」であるとか、「寒山拾得」であるとかというような非常にユニークな禅宗の祖師たちですね、そういう人たちが描かれるわけです。

ところが、西暦で15世紀の初め、日本の年号でいいますと応永という時代があります。15世紀になりますと、この水墨画の世界が一転してしまうわけなんです。このほとんどが人物画であった水墨画の作品が今度はほとんど山水画、風景画の世界になるんです。風景画という言い方は恐らく近代以前の日本の絵画にとってはまずいんで、やっぱり山水画という言い方で申しますが、15世紀に入って山水画が描かれるようになり、ほとんどが山水画になります。この辺の転換の速さっていうのはやっぱり……。禅宗というのは中国から伝わってそのまま中国的なスタイルを持っている宗教で、それに伴った水墨画というのも当然その中国的なバックボーンを持った文化なんですけれども、この14世紀末から15世紀初頭にかけての人物画から山水画への展開というのは、これは恐らく日本人の何か思い詰めたら一遍に走ってしまうような気風が、珍しく文化の上に出てきた例じゃないかと思っただけで、ちょっとびっくりするぐらいなんです。本当に山水画一辺倒になってしまうわけです。人物画はもうほとんど描かれなくなる、山水画しか描かれなくなる。

この山水画というのは、そこら辺にある風景を描くという意味ではなくて、単に山水画、風景画と言っておりますけれども、実は非常に特殊な、ある種の山水画であったわけなんです。これが何だかというと、御承知のように日本の古い絵画というのは縦長の作品が多いんですが、それがさらに極端に縦長になりまして、その画面の下の方の5分の1なり4分の1なり、あるいはもっと小さい場合には8分の1ぐらいの割合のところ風景、つまり山水が描かれて、その上に何段にも重なって漢詩が書かれているという、きわめてスタンダードではない形の山水図が描かれる、これが全盛を迎えるわけです。

その山水というのはどういう特殊な山水かということ、山が描かれ、水が描かれ、これは山水図ですから当たり前なことなんです、山が描かれ、水が描かれ、そしてその彩りに松の木が描かれ、岩が描かれ、滝が描かれ、あるいは雲が描かれということなわけですけれども、必ずそこに構成材料として家が1軒描かれるわけです。これは、わらびきの家であったり、あるいは瓦を敷いたちゃんとした楼閣であったり、一見してお寺であったり、あるいは東屋であったり、何でも構わないんですが、とにかく画面の、一隅に家が描かれる。そこへ、家につながっていく道が描かれ、そしてその道の上を多分1人か2人の老人が・・・男性です、年寄りです、大抵は僧侶の・・・僧侶というか中国の道士の格好をしている人物が描かれている。ほとんどがそうなんです。たまに人物が描かれない場合もありますけれども、必ず家にはその人が住んでいる雰囲気、気分というのが暗示されているような作品なんです。これは何だかというと、要するに私たち、いわゆる町の中で、益田は、あるいは

はこちらに御参会の5つの市町はお見受け、想像するところ、さほどのことはないかもわかりませんが、私が住んでおります京都なんていうのは、やっぱりぞっとするくらい人が多くて雑踏なんです。そういうところへ住みながら、ちょっとした心の片隅に、どこか静かなところへ行きたいなという願望があるわけですね。皆様方も恐らく物理的な雑踏じゃなくて仕事の上での雑踏でいろいろあって、もう何もかもおっぼり出して引退したいな、隠遁したいなんて思っておられる方がおられるかもわかりませんが、そういういわば一種の隠遁思想というものに支えられた思想というんでしょうか、隠遁志向というものをまさしく反映した絵なんです。これは、後でざっとスライドをお目にかけてみますが、もう一度そのときに具体的にお話ししたいと思います。

極端なことに、15世紀の前半、特に1410年ごろから1450~60年ぐらいまでの間の50年間というのは、今残っている水墨画の作品の恐らく9割ぐらいがいわゆる書斎を……。ちょっと申しませんが、家が描かれているとか道が描かれているというのは、結局隠遁生活を示唆しているわけです。隠遁というのは、我々ですとテレビジョンがあったり、衛星テレビが映るテレビジョンがあったり、テレビゲームが使えるパソコンがあったりというようなことになるのかもわかりませんが、この当時の人は恐らく書物なんです。静かなところで、風のそよぎと清流の音を聞きながら詩を読む、本を読むということが唯一の隠遁の条件だったんだろうと思います。ですから、書斎というのが必ずその絵の中に意識されている。それで、書斎画軸、書斎の描かれた図ということで書斎画軸、あるいはそれに上に詩が書かれているわけですから、書斎詩画軸というふうに言うわけですが、そういう作品がほとんどであって、画題的に分類しますと人物画があり、そしてもう一つ山水画に対抗するものとして花鳥画という言い方ができるわけですが、花と鳥の絵ですね、花鳥画もほとんどありませんし、人物画も非常に数が少なくなってしまって、圧倒的に書斎詩画軸の山水図が多くなるというのがこの15世紀の前半なんです。

それが雪舟が登場してくるまでの水墨画の背景であります。雪舟は御承知のように応永27年、西暦でいいますと1420年に、今こちらにおいでいただいております総社市の赤浜というところで生まれたということになっているようです。昨日市長さんにお聞きしたら、やはり記念碑は立っているようですが、実は最終的にははっきり確定していないんだというふうに承りました。総社市でいいんだと思うんですが、1420年、応永27年に生まれました。あらかた雪舟の年譜というんでしょうか、動きというのを考えてみますと、絵を描いてばかりいて、どうもしようがない小坊主だということで、お堂の柱にくくりつけられた雪舟が涙で足の指でネズミを描いたところ、帰ってきた和尚がびっくりして縄を解いたという話の、これが岡山の井山宝福寺であるという説があるわけで、我々子供のころにそういうことを教わったわけですが、これもはっきりしておりません。むしろ、春林周藤という禅僧に伴われて上京し、京都の相国寺という、御所のちょうど裏側にあります相国寺、今でもあるんですが、相国寺という、その当時新興の禅寺で非常に栄えていた相国寺にいたかもわからない。10歳代ごろの雪舟の動向というのは宝福寺であったのか相国寺であっ

たのかがちょっとわからない。ですけれども、地方の多分郷士の次男坊、三男坊の生まれとして子供のころにお寺に入るといのはこれは当たり前前の生き方であって、雪舟の生まれといのはさほど裕福なうちでもなければ貧しいうちでもなく、いわゆる標準的な中の上ぐらいの生まれだったんだろうなというふうに思うわけです。

それから、はっきり資料が出てまいりますのは、37歳のころに雪舟は京都の相国寺で知客(しか)という役職についていた。この「知る」という字と「客」という字を書いて「しか」と読むんですが、この上に雪舟の名前である等楊の「楊」という字をつけまして「楊知客」という呼び方を当時の友人が雪舟に対してしておりました。このころ、37歳ぐらいには少なくとも相国寺の知客であったということははっきりしているわけです。

その次に、45歳のころ、西暦で申しますと1464年になるんですが、寛正5年、1464年に周防の雲谷庵に雪舟はいるんです。ですから、この37歳から45歳までの間のいつかの時期に山口へ雪舟は移動したわけです。このときに、45歳のときに雲谷庵に雪舟を尋ねた

之恵鳳という東福寺のお坊さんが文章を書いておまして、そのときに「前10年の握手を説く」という言い方をしている。禅宗のお坊さんといのは、今はどうかわかりませんが、当時の禅宗の坊さんといのは白髪三千丈式の非常に誇大な表現を好んだわけで、ですから「10年の知己を結ぶ」という言い方が、果たしてストレートに10年前に雪舟は京都を去って山口へ行ったんだということにはならないんですが、少なくともそれに近い。ですから、40歳ぐらいのころには恐らく、40歳といのはやっぱり立つんですかね、人生の転換期であるわけですが、今はもうちょっと後かもわかりませんが、早いのかもわかりませんね、どっちかちょっとわかりませんが、昔は40歳といのは一つの節目だったわけです。そのころに、恐らく雪舟は京都から山口へ。これは何だというわけですね。今でこそ小郡まで新幹線が走っておりまして、山口へ行くといってもそんなに差は感じないんですが、恐らく15世紀のこの時点ですと、京都といのは物すごく大都会であり、山口、周防といのは、今との比較ですけれども、何でそんなところへ行ったんだろうなという疑問が、これは疑問からスタートしていろいろ話が展開していくわけですから、ひとつ皆様方も考えていただければいいかと思うんですが。

大内氏という大名が非常に勢力があって、足利の京都と対抗するくらいであったと言われてはいるんですが、その辺に理由があったのかもわかりませんが、後50歳のころに雪舟は中国へ旅行するわけですね。今の中国旅行とか、我々がヨーロッパへ行くのと違ってもっと大変なことです。京都におったら行けるか行けないかわからない。どうしても中国へ行きたい。山口が中国へのルートがつながってるということで、それで山口へ行ったんじゃないかなというふうにも思うんです。

それからもう一つは、親友がいて、どうも引っ張ったらしいんですね。牧松周省という最晩年の山水図に賛をしている坊さんが山口の出身であって、多分その縁故で行ったかなということがああるんです。

もう一つは、マイナス面からいいますと、京都をはじき出されたんだということになる

んです。京都をはじき出されたというのは、相国寺に周文という有名な水墨画家がいる。この職を継いだのが宗湛という人であったり、あるいは狩野派の創始者であります正信という人であったり。絵画史の上でこういう系譜ができるわけですね。つまり周文の後、幕府の御用絵師の職を継いだのは宗湛であり、そして正信である。このラインから何らかの理由で雪舟がはみ出した、つまり飛ばされたんだという見方もネガティブにはできるわけです。しかし、この山口行きというのは、たとえ飛ばされたんだとしても、本当に雪舟が相国寺の中での地位と、あるいは御用絵師としての地位を確保したいというふうに思っていなかったら、何も飛ばされたことにならないんで、初めから自分はある意味では隠遁志向であったとすれば、飛ばされるのは渡りに舟で、これは非常にラッキーだというんで、その40歳ごろに恐らく山口へ行ってしまったのではないのでしょうか。

50歳から両3年というんですから足かけ3年ですけども、実際は1年半ぐらいの間中国へ行って浙江省へ上陸し、そして運河伝いに北京まで行って帰ってきている。雪舟は、中国へ行く前の50年、ですから物心ついてから20年か30年か、つまり画業の物心がついてからですけども、20年か30年かわかりませんが、とにかく水墨画を勉強しておって、描いておって、一度そのオリジンの中国へ行ってみたいなというふうに彼は思ってたはずなんです。行ってみると、あに図らんや、そのころ中国で描かれていた絵というのはさっぱりおもしろくなくて、できも悪くて、ろくな画家がないということ、後に「破墨山水図」の自分の文章の中に書いているわけです。これは、歴史的に見ても事実なんです。つまり、15世紀のこのころの中国の画壇というのは非常にマンネリズムというか型式主義の時代でありまして、かたい絵が描かれている。恐らく雪舟ほどの力量の人から見れば非常に不満であったんじゃないかというふうに思うわけです。逆に、天童山の景德禅寺で第一座の、これは何か絵を描いたはずなんです、絵を描いて、その御褒美に第一座、首座という位を型的にもらったり、あるいは北京へ行ってその当時の礼部院というお役所が新築されて、その壁が空いておって、それにどういコネかわかりませんが、この男は日本のすばらしい水墨画家なんぞということで絵を描かされるわけです。で、多分竜の絵を描いたんだそうです。見たことも聞いたこともないんでわかりませんが、多分そうだというんですね。それが大げさな表現だと思うのですが、「おまえたち」・・・中国の画院の画学生に言ってるんですが、「日本みたいな片田舎からやってきた絵かきが描いた竜がこんなにすばらしいのに、おまえたちは一体何をしているんだ」と言ってるんです。これが中国向けに言ったのか日本向けに、雪舟向けに言ったのかはちょっとわかりません。ですから、本音はどうかわかりませんが、

そういうことで、中国へ行き、そして何を学んだ。結局何も学ばないで帰ってきたんだら、これは雪舟は凡人なんです、実は彼はそこで大自然というものを……。中国の自然というのは、私も2度ばかり行ってまいりましたが、随分日本の風景とは違います。のどかですけども大変すばらしい。水墨画を勉強しているような私たち、自分では描きませんが、水墨画史を勉強しているような私たちにとっては中国の自然とい

うのは本当にすばらしいと思うんですが、ですから雪舟はもっと感激したんだろうと思うんです。で、いろいろ写生をして帰ってきた。やっぱり絵のふるさとは自然だということを実感したわけです。帰ってきて作った作品に、今日もおいでいただいております大分の大野町に沈墮の滝という滝がありますが、その滝を描き、それからこれ、雪舟の郷記念館に今複製か何か並んでいると思うんですが、「山寺図」を描き、それから天橋立の絵を描くという、後にそういうところへ発展していくわけですね。

帰ってきてから、さっき申し上げましたような「秋冬山水図」が恐らく帰ってきてしばらくした時期に描かれ、そして「天橋立図」が描かれ、「山水長巻」が67歳で描かれ、「破墨山水図」が76歳で描かれ、そして最後に雪舟もやっぱり禅僧であり、隠遁思想にやっぱりあこがれておったというのがわかる非常に精神的には弱々しい作品が最晩年の、大原家のお持ちになっている牧松周省が追賛をした「山水図」が最晩年に描かれている、こういうプログラムなんですね。

そこへ人物画、肖像画を当てはめてまいりますと、これは入明以前ですけれども、46歳の「仁保弘有像」、それから60歳の「益田兼堯像」、それから65歳の今修理中で今回は展示は残念ながらされなかった「陶弘護像」、そして唯一禅宗のお坊さんの肖像、頂相（ちんそう）というんですが、頂相を描いた77歳のときの「全岩東純像」という4点の肖像画があるわけです。

この年譜の中に、雪舟の有力な作品とこの人物画、肖像画を配置しまして、さらに実は遺作の数から言いまして、雪舟の5点の国宝を含む山水画の作品と匹敵するか、それより少し多いぐらいのいわゆる道釈人物画の作品が現在も残されているんです。昨日ちょっといろんな本を見ながら、雪舟ないしは雪舟のコピーですね、古い時代の弟子による写しというのを加えて数えてみましたら、一応雪舟ないしは雪舟がオリジナルを描いたには違いないであろうという作品が13点も上がってまいりまして、やっぱりこういうことを見ると、単に雪舟が山水画家ではなかったということが言えると思うんです。

もう一つのジャンルがあります花鳥図は、これも益田兼堯の孫の宗兼の祝言のお祝いに描いたという屏風が現在残っております。それ以外にも、71歳のサインのある屏風があります。ですから、花鳥図も描いておる。山水図が確かに本領ではあったのかもわかりませんが、人物画がそういうわけがかなりある。それから、花鳥図にも手を染めておる。

このいろんな画題をこなすというのは、実はこの時代はひょっとしたら雪舟が京都にいたらまずできなかつたんじゃないかなと思います。周文が相国寺にいて御用絵師であったときに、同時に幕府の仕事をしておったらしい画家がいるんです。土蔵という、土の蔵ですね、土蔵栄崇という人なんですが、これは文献に出てまいります。そして、作品も一、二点残っているんですが、人物画、仏画を描いております。周文というのは、逆に今度は人物画は描いていないんです。山水画、今の我々の学界での定説はという意味ですが、山水画しか描いていない。その次の世代の宗湛と正信という2人の御用絵師、いずれも京都で周文と非常に密接に関係して活躍した人たちですが、宗湛は山水画を描いているけれど

も人物画を描いていない。それから、正信は山水画も現在印のある作品が1つ残ってますけれども、これはちょっと、むしろ文献上肖像画を含む、人物画の作家であるというようなイメージを受けるほど、恐らく人物画にこだわっています。つまり、画題による分業が行われていたのではないか。それは自発的にそうであったのではなくて、あるいは社会的な評価が、あの男の人物画はだめだからあいつには人物を描かせないでおこうというのではなくて、将軍が「おまえはこれを描け、おまえはこれを描け」という、つまりいわゆる「筆どめ」ということがありますね、禁止をする、それに近いことがどうも行われていた可能性があります。それほど将軍は横暴であったわけですから、そういうことがあった。逆にいうと、それほど画家たちが芸術家意識を持っていなかったということになります。今度はこれだけいろんなフィールドに手を染め、いろんな描き方をした雪舟という人は、そういう制約を受けなかった。逆に言うと、彼は非常に現代的なというか近代的な芸術家意識を持っておったという解釈にも逆説的につながっていくわけで、この辺が雪舟の偉大さだろうと思うんです。それが防府なり石見なり、この辺で生活をした、雪舟が生活をしたこの地方の自由さであったということが1つ。それから、彼自身が芸術家であり、天才であったということが1つ。

それからさらに、だんだん時間がなくなりますのでちょっと飛ばしますが、さらに言うと、画題の多様性に従って彼は非常に幅広い画風をやっている。さっきの山水図で申しますと、「秋冬山水図」と「山水長巻」と最晩年の「山水図」というのは、これはいわゆるお習字でいいますと楷書、楷体の山水画。それから、「天橋立図」というのはどちらかという于行体の山水図で、行書になります。それから、「破墨山水図」というのは草書になるわけですね。これだけの幅を持っている。それから、人物画でもこれは後でスライドでお目にかけますけど、非常に筆が太くって遅くって力強いものから、割とシャープな細い線を使って比較的早く筆を走らせた作品まである。どうやら画題によって、描く対象によってスタイルを変えているんですね。これはなかなかできないことだと思うんです。あるいは、ひょっとしたら注文主の注文によって描き分けるだけのテクニックを彼は持っていたんじゃないかなというふうにも思えるわけですが。

そこで、非常に時間的に切迫してまいりましたので、特に人物画ないしは肖像画のことには全くお話の中ではふれなかったわけですが、人物画のスライドを中心に、スライドをごらんに入れながら雪舟のその幅の広さ、あるいは彼がいかに個性的であったかということをもうちょっとフォローできたらと思います。あと20分か25分ぐらい、ちょっとスライドを見ながら話を進めていきたいと思います。

お願いいたします。〔スライド〕雪舟像（常栄寺）

ちょっと、私の位置からこれがどんなふうにそちらからごらんいただけてるのかよくわからないのですが、今回記念館に展示されている山口の常栄寺さんの御所蔵の雲谷等益が模写をいたしました雪舟の、彼が71歳のときに自分で描いた自画像の写しということになるわけですね。もう一つ違う系統の自画像があるんですけど、これはスタンダードな自画

像で、こういう人だったと。これはいろんな教科書にも載っておりますけれども。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕瓢鮎図（退蔵院）

水墨画の歴史というか、14世紀の人物画の流れというのは飛び越しまして、15世紀に入りますとこういう作品ですね。これは、雪舟からいいますと2代前の、周文のさらにその前の師匠になります如拙という人が描きました、足利將軍義持の命令で描いた瓢筆に鮎（鯰の古字）という有名な作品ですね。浅い小川を泳いでおるぬるぬるした鮎を瓢筆で押さえるという、できそうもないことを義持がテーマで出すわけです。それに対して如拙がこういう絵を描いて、この絵を見ながら上に31人のお坊さんたちがそれぞれ自分の感想を書いているわけです。大変おもしろい詩があるんですけども、要するに絵と詩とを同時に鑑賞する。これ自体は実は本来詩画軸ではなかったんですけども、衝立だったんですけども、後でこういうように改装をされました。1つの画面の中に絵と詩を同時に鑑賞するというやり方は、日本と中国にしかありません。世界中で、ほかの国にはありません。字を鑑賞するということが欧米人には不可解なんです。それは余計なことですけど。

はい、次お願いします。〔スライド〕柴門新月図（藤田美術館）

そして、この絵は柴門新月という図なんです。下の部分だけで、上にこれの3倍ぐらいの詩の部分、今スライドではカットされておりますが、中国の唐時代の詩人の杜甫が詠んだ南隣の詩という詩がありまして、その詩にちなんだ絵を描き、そしてこれはわらぶきの非常に質素な家を配して、さっきから申しておりますような隠遁趣味の非常に濃い風景だというのはおわかりいただけると思うんです。多分、あそこへ立っている2人の人物は、1人は主人であり、そして1人は尋ねてきた友人が帰っていくところ、もう一人は童子ですね、おつきの人です。

こういう、いわゆる山水画。これ、水はないのかもわかりませんが、山水画ですね、こういうものが描かれる。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕待花軒図（出光美術館）

そして、これは花を待つ軒、待花軒という、「けん」は車へんに干という字を書く何々軒ですね。「待花軒図」というふうに命名しておりますけれども、これが典型的な書齋詩画軸なんです。これは瓦を敷いた、ちゃんとした立派な屋敷が描かれておりますけれども、実はこのところに、これはちょっとごらんになりにくいんですが、書物が、本が立ててあるんですね。ですから、これは書院の、いわゆる床（とこ）の上に本が置いてある。そして、本を読んでいる人物、主人は描かれていないんですが、庭には、童子が落ち葉を掃いている。これは何を意味するかというと、その主人、つまり書齋にこもって隠遁生活をしている主人のところへ恐らくだれか友人が尋ねてくるという予定があって、早朝に童子が落ち葉を掃き、水をまくという仕事をやってる。ですから、こういうのをいわゆる書齋軸という隠遁を好んだ生活をしているのを暗示する作品。こういうふうの上に、この絵にちなんで、これは自分の心境をそのまま描いているんだということで、また上にいろいろと詩を書くという、こういう一種のゲームみたいなものが当時非常に盛んに行われたわけで

す。

はい、次、お願いいたします。〔スライド〕竹斎読書図（東京国立博物館）

これは、上に長文の序文がありまして、その頭に「竹斎読書」というタイトルがあります。やっぱり非常に奥深い山の中に、ここに書斎があります、家があります。そして、ここに2人の人物が豆粒のごとく描かれている。こうやって行くわけですね。ここで隠遁生活をするという。

実は、この時代の山水画、15世紀になって山水画が全盛を迎えるわけですが、1つだけ皆様方にぜひ御理解しておいていただきたいのは、この時代の日本の山水画というのは、まず1つは現実の風景を描いたものではなくて、これは心の中に浮かんだ願望をあらわしたものであるということをご記憶を願いたい。

それから、画面の中には、さっきの「待花軒図」には主人の姿はありませんでしたが、予想される主人はドアの一枚向こうにいるわけです。それから、この「竹斎読書」では山道を豆粒のように登っていく人物が描かれている。100%、人物というのがいるんです。いなくっても予想されているんです。

ですから、現代の風景画がひょっとしたら、東山魁夷さんの絵を思い浮かべていただくといいんですけど、あの中にはやっぱり人物はいないですね。風景画の中に人物がいるかないか、あるいはいるはずであるか住めない自然であるかというのは、これは見どころのポイントになる。まず、この人物がここにいるということをひとつ御記憶願いたいわけです。

それから、このタイプの絵を鑑賞するときは、ですから客観的にこの風景を眺めるのではなくて、あの豆粒のような人物に自分が同化するんです。感情移入をする。彼の目で見上げ、水を見て、松のそよぎを聞く。そして、ああもう少して自分の書斎のある家へ帰れるとか、あるいは書斎に住んでいる友人を尋ねていく、もうちょっとだなという気分を味わっていただくのがこのタイプの絵の鑑賞の方法なんです。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕秋景山水図（東京国立博物館）

ところが……、雪舟という人はちょっとそれを打ち破ろうとするんですね。今申し上げたような山水画の描き方、あるいは鑑賞の仕方というのを打ち破ろうとするんです。しかしここではまだ若干そういう意識があるんですね。これは国宝の「秋冬山水図」の秋の方ですけど、ああいう楼閣があって、そしてその楼閣への道がこういうふうに見え隠れしながらつながっていくという約束事は守っているわけですが、まず1つ、詩が書かれていない。詩を書く余地が画面の中にないということですね。これは一つ大きなポイントです。

それから、あえてそこへ住むはずの人物というのは描いていない。ここに、この2人の人物が対話しておりますけど、これは少なくとも感情移入していくような、杖をついて山道を登っていく、隠遁する姿の老人ではない。そして、構図的に非常に理詰めの構図を、先ほどの、周文の絵と比べていただきますと歴然とわかると思うんですが、非常に組み立てがしっかりしている。遠景と近景がはっきり描き分けられて、それから近景の中でも道

を使って遠近をあらわすというのはうまいテクニックを使ってるわけですね。

はい、次お願いします。〔スライド〕冬景山水図（東京国立博物館）

それから、これがその反対側の冬の景色です。ここでも同じように、やっぱり道を使った S 字型の構図と、それから崖を垂直におろしてきて、それで前面を遮断して、その後ろの距離を明確にするというところがよく出ているわけです。

はい、次お願いいたします。〔スライド〕破墨山水図（東京国立博物館）

それから、これがその次に位置する「破墨山水図」ですね。これは、いわば印象派の作品とっていいと思うんです。テーマは詩画軸のテーマですね。酒簾を、酒屋の旗印を掲げた、開店してますよというこの旗を掲げた家があって、そして舟に網を修理しているような人物が描かれ、そして岩山が描かれ、樹木が描かれ、山が描かれる。これは詩画軸のパターンなんですけれども、これを見事にこういうふうに、何か光の世界の中へ導いていくような素晴らしい絵です。

はい、次お願いいたします。〔スライド〕山水長巻（毛利報公会）

これは「山水長巻」の冒頭の部分です。これは、実はずっと全巻お見せすると意味がわかっていただけなんですけど、これはその詩画軸風の描き方をした老士が山道を登る山水なんです。ところが、この場面だけ見るとそうなんですけれども、実はこれは彼自身なんです。ここから後、16 メーターつながっていく中に、いろんな風景が出てきて、いろんな人物と対話をし、いろんな景色、場所、風景を見るという形があるんです。単に山の庵へ帰っていく詩画軸の人物とは性格が違うということ、なかなかこれは全部見ないとわからないんですけど、秋に毛利報公会で本当の雪舟の山水長巻をお並べになるんで、ぜひ一度は……、全巻広がるケースがありまして全部見れますので、ぜひ見ていただきたいと思います。これが「山水長巻」です。

はい、次お願いいたします。〔スライド〕天橋立図（京都国立博物館）

それから、これが「天橋立図」ですね。定説どおり、ずっと最後の方へ置いたんですが、スライドというのは実は大変いい面と不便な面とありまして、みんな画面が同じ大きさになる。これは「山水長巻」とか「秋冬山水」に比べると数十倍の面積をこなした作品で、実際にこの作品を前にしますとかなり圧倒されるぐらいの力強さ、迫力があるんです。こんな絵を 80 歳になってから。というのは、次にお見せする最晩年の牧松周省の追賛のある「山水図」がやっぱりその時代だとすれば、あの絵を描く気弱さというか、何というか、やっぱり老境の人がこんな絵を描くはずがあり得ないですね。ですから私は 62 歳とか 63 歳の東行の間に描いた作品だと思うんですが、実にすばらしいスケールの大きな作品です。そして、描き方は、さっき申しましたように、「破墨山水図」と「山水長巻」の間に位置する柔らかいかき方であるということでもあります。

はい、次お願いします。〔スライド〕山水図（大原家）

これがその最晩年の 80 歳を超えた作品。これは、私は非常に好きな作品なんですけれども、よく眺めると、ちょっと弱いんですね。どっちかという、「秋冬山水図」のような

がちりした組み立てもないし、「破墨山水図」のような切れのよさもないし。そうかといって、彼が生涯に学んだいろんなテクニックというのを使ってるんですけども、遠近感であるとか、あるいは立体感であるとかいうものがやっぱり少し弱いし、崩れている。なおかつ、ここに描かれている人物というのは、これは雪舟自身なんですし、あるいは詩画軸の中にかかれた人物と同じなんです。初めて雪舟はここで彼自身の気弱さというものを提示しているように私には思えるわけです。上に牧松周省の非常にいい詩がありまして、ちょっと映っておりませんが、これもぜひ見ていただきたい作品なんです。「東漂西泊舟千里、北郭南涯夢一場、我また相従いて帰去せんと欲す、青山聳ゆる処是家郷」

はい、次お願いします。〔スライド〕黄初平図（京都国立博物館）

これから人物画を少し、どんどんお見せいたしますが、これは小さい作品で、流れがきの団扇の中に中国の梁楷の作品を雪舟は学んで縮写した、黄初平という中国の人物を描いた作品です。これは、非常に鋭い筆を使っておりますね。

はい。〔スライド〕寿老図

それから、これは「寿老図」です。これなんかごらんいただいても、やっぱり非常に筆が遅い、余り筆が走っていない。それから、顔がなかなか重厚な描き方をされてる、表情がですね。

はい。〔スライド〕韋駄天図

これは、雪舟の数少ない仏画のジャンルに入ります「韋駄天図」です。ここでも筆の太さは少しは細くなっておりますが、やっぱり割合遅い筆つかい。

はい。〔スライド〕寿老図（ボストン美術館）

これは、最近ボストンの美術館で発見されたという「寿老図」ですね。これも同じように……。

人物画の年代設定というのはなかなかまだ理解しにくいところがあってわからないんですが、適当にお見せしております。

はい。〔スライド〕渡唐天神図（岡山県美術館）

それから、これは岡山の県立美術館が最近所蔵品にいたしました「渡唐天神図」なんです。これは、非常に筆がシャープなんですね。画題に応じて描法を変えるという話をさっきいたしました。これは詩文学の神様である菅原道真ですから、というわけではないんですが、非常にシャープな筆つかい。この辺のシャープな筆つかいというのが肖像画に通じていくところがあるのではないかというふうに思えるわけです。

はい。〔スライド〕梅くぐり寿老図（文化庁）

そして、これは大正の震災でなくなったという風説のあった「梅くぐり寿老図」というちょっと問題のある作品なんですけれども、非常に不気味さを表現しているんですね。ひょっとしたら、真筆かどうかというところもあるんですけども。

はい、次、お願いいたします。〔スライド〕維摩居士像

これは、すばらしい作品なんです。これは「維摩居士像」で、画中に「香積寺常住の為に描く」というサインがあります。香積寺というのは、たしか今の山口の瑠璃光寺の前身だったというふうに記憶しております。それから、同じ山口の洞春寺に中国の顔輝という人の描いた有名な絵があって、それをそのまま写して、自分流にそしゃくした絵だと思うんですが、なかなか迫力のある強烈な、重厚な絵ですね。

はい。〔スライド〕達磨図

これはほとんど見えませんが、「達磨図」です。これも線の動きの太さという、豪壮さというのを、重厚さというのを見ていただければ結構だと思います。

はい。次、お願いします。〔スライド〕恵可断臂図（斎年寺）

それから、これは愛知県の斎年寺に今伝わっている「恵可断臂図」、達磨に弟子入りをする二祖恵可が自分の腕を切って自分の決意のほどを示したという、禅僧である雪舟、あるいは禅僧にとってこれほど極限的な情景というのではないわけですね、自分たちの先祖のこういう物すごい、ぞっとするような光景。そういう情景を描くのに雪舟は、今までずっと人物画を見てきていただきましたが、いろんな描き方をしているわけですが、ここで何を考えたかという、やっぱりいかにこの情景を深刻に、厳粛にあらわすかということと、いかに客観的にクールに描けるかということに挑戦したのではないかと思うんです。この線描の単純さという、特に人物ですね、背景の岩は別でパターン化されておりますけれど、人物に関してこんなに単純に、切り紙みたいに描いたというのは、これは雪舟の一つの極点だと思うんです。

はい。〔スライド〕仁保弘有像（源久寺）

それから、肖像画を4点。これは仁保弘有像です。大内氏の部下の武将です。雪舟が中国へ行った時のリーダーの天与清啓が賛をしています。カラーでなくて大変失礼いたします。この辺は作品が実際にごらんいただけますので。

それから、領主たちの肖像というのもやっぱりある意味での権威づけのためにはどうしても必要なものであったわけですから、そこにいた有名な力量のある絵描きが、画僧が肖像画を描くということは非常に当たり前のことなんですね。それを描かないという方が、描けないという方がおかしいんで、彼らの絵の修業の基本というのはやっぱり人物を描くという、この肖像を描くという身近なところから始まるんじゃないかと思うんです。意外に有名な画家の中に肖像画を残している人は少ないんです。実は、雪舟と賢江祥啓ですね、啓書記と、それから後に出てくる雪村ぐらいのもので、なかなかないんで、日本の画壇というのは昔からかなりいびつだったんだなあというふうに思うんです。

次、お願いいたします。〔スライド〕益田兼堯像（益田市）

いろんな肖像画の中で、多分この「益田兼堯像」が一番やっぱりシャープな、鋭い。あとの3点については、若干問題がないではない。この作品も、昔の研究者は「ひょっとしたら」というようなことを言っていたんですが。それは、印が黒い刻印の等楊印であるというようなことからなんです。これは漢画のスタイルでなくて大和絵のスタイルなんで

すね。雪舟が大和絵を描いたという記録はないというようなこともあるんですが、ともかくいかに幅広く対象に応じて描き分けられるかということのいいサンプルだと思うんです。この顔の表情のうまさというか、鋭さというのは、やっぱりちょっとほかの画家ではないんじゃないかと思うんです。

はい。〔スライド〕陶弘護像（竜豊寺）

「陶弘護」、これは今回残念ながら修理中で展示できなかつたようでございますけれど。やはり、大内氏の重臣の一人です。上に例の牧松周省の長文の賛があります。

はい、次お願いします。〔スライド〕全岩東純像（瑠璃光寺）

全岩東純ですね、文明5年から20数年、瑠璃光寺に住職をした中興開山の像です。禅宗にとって禅僧の肖像画という、頂相というのは一番大事なものであって、いつの時代でもお寺には必ず必要であり、禅僧にとっては自分の師匠の絵というのは必要であったわけですから。

この4点が雪舟の肖像画ですね。

それから、一つおもしろいのは、細川家の永青文庫に、サイン、落款はないんですけども、「琴棋書画図」という屏風がありまして、これが非常に雪舟流の筆を使っているんです。

はい。〔スライド〕琴棋書画図（永青文庫）

少し、これは全図です。半分ずつ2枚お見せしたんですが、絵を鑑賞しているところ。さっきのは音楽をやってる、琴をやっているところですね。こういう画題があって、こういう絵を伝統的によく描くんですが。

はい、次お願いいたします。〔スライド〕部分

これ、部分ですけども、これ、いわゆる琴、「琴棋書画」の琴の部分、音楽の部分なんです。それよりも琵琶があつたり笛があつたり猿回しがいたりという、この画題を展開させた作品なんです。この人物の描き方をごらんいただきますと、先ほどの団扇の「黄初平図」と非常に近い。ですから、かなり若いころの雪舟の人物画だろうというふうに思うわけです。

はい。〔スライド〕山水長巻の部分

それから、これですね、「山水長巻」の中の一番有名な秋の部分の山の市の部分です。収穫を祝っている人たち。雪舟の山水画の中に登場してくる人物は、さっきの最晩年の山水を除いて通常の山水画、周文以下の山水画にあつたように点景の人物ではなくて、1人ずつが意味を持った人物を描いているということが非常に大きな特色だと思うんです。この人たちに、実は雪舟はあの山道を登ってきて一生を過ごしながら、いろんなところへ旅をして、いろんな人に会い、語り、学ぶという姿勢があるわけです。それがこういう山水図の中の人物の表現にもちゃんと出てきているということなんですね。山水画の中にこんなに、風景画の中にこんなにたくさんの人物を描いた例はほかに全くありません。

はい、次をお願いします。〔スライド〕釈迦伝図（壬生寺）

それからもう一つ。これは、お釈迦様の伝記をかいた「釈迦伝図」というのがあります。雪舟、多分写しだろと思うんですが。

次をお願いいたします。〔スライド〕釈迦伝図（部分）

その部分ですが、この中の人物もなかなかユニークな人物が描かれていて、これも雪舟流の人物。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕国々人物図巻（京都国立博物館）

そして、これは「国々人物図巻」という名称で残っている。つまり、中国へ雪舟が旅をしたときに写生をした図巻の一部です。いろんな人物をこういうふうに見につく限り描いてきた。この辺の人物、先ほどの人物画にそれぞれつながっていくわけですね。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕蜷子和尚図、可翁筆（東京国立博物館）

もう一遍逆戻りしますが、これは14世紀の、雪舟より100年ぐらい前の可翁という人が描いたいわゆる道釈人物画、「蜷子和尚の絵」ですね。今までごらんいただいた雪舟と、この伝統的な水墨画の人物画の差というのをひとつごらんいただきたいとお見せしたわけです。

はい、次を。〔スライド〕瓢鮎図、如拙筆（退蔵院）

これは、先ほどの「瓢鮎図」の老人のアップです。この辺の人物の表情、それから体の動きと、雪舟の人物とを比べていただきたい。

はい。〔スライド〕柴門新月図（藤田美術館）

これは、詩画軸の「柴門新月図」のアップですね。顔の部分が多少傷んでおりまして表情が豊かではないんですけども、余り描かれている人物の性格表現というようなことは無いんですね。単なる人物、サインであるわけです。人物がいますよというサインに近いわけです。

はい、次をお願いします。〔スライド〕陶淵明賞菊図、秀文筆

これは、やっぱり秀文が描いたと思われる、秀文という朝鮮からやってきた画人です。陶淵明です。陶淵明なんていう非常に性格がはっきりした人物を描きながら、ここに描かれている姿を見ると、顔を見ると、単の老人であるというだけのものなんですね。

はい。〔スライド〕寒山拾得図、松 筆

これも「寒山拾得」、これは松 あたりの作品かなというんですが、非常に鋭い、すばらしい筆つかいではあるんですけども、おさまり切ったというか、顔の表情なんか割とスタンダードなものです。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕梅くぐりの寿老図

それに比べて、これは「梅くぐりの寿老」のアップですね。物すごい顔をしているのがおわかりいただける。寿老人という非常にユニークな人物。

はい。〔スライド〕寿老図

それから、これも同じく「寿老」のアップですね。ちょっとごらん……、この人物の顔が雪舟の自画像に似ているところがおもしろいんですけどね。

はい。〔スライド〕恵可断臂図

それから、こんなに大きくして見たのは久しぶりなんですけども、やっぱり随分迫力があるんですね。やっぱり目の達観したすごさというようなものが本当によくあらわれている。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕同

これは相手の恵可の方です。本当にまじめな表情が印象的です。

はい、次をお願いします。〔スライド〕涅槃図、朱阿筆

少し雪舟のお弟子さんたちの作品。これは、照陽軒朱阿という山口の時宗のお寺にいたお坊さんで、雪舟に師事をしていた朱阿という人の「涅槃図」ですね。

はい、どうぞ。〔スライド〕児文殊像、周耕筆

それから、これはやっぱり弟子の扶桑周耕という人の「文殊菩薩図」です。児文殊ですね。

はい、次をお願いいたします。〔スライド〕達磨図、拙宗筆

雪舟流というのか、垂流というのか、お弟子さんたちの力量というのはやっぱりこうやって比べてみますと、これは拙宗という雪舟と同一人かというような人もいるんですけど、多分同世代の雪舟系統の絵描きだろうと思うんですが、それなりによさはあるんですが、雪舟の迫力というものと比べると、やっぱり格段の差があるなという感じがいたします。

はい。〔スライド〕琴高仙人・群仙図、雪村筆（京都国立博物館）

そして、多分人物画として雪舟の域に迫ったのではないかと思う画家が、やっぱり雪舟から 50 年、60 年隔たった時代に登場してきた、常盤に終生いた、茨城県ですね、雪村という画家がいるんですが、この人はやっぱり唯一雪舟と対抗できる人かなという感じがいたします。

はい。〔スライド〕同

これもそうです。おもしろいんですね。「三幅対」の一つで、真ん中に鯉に乗って空を飛んでる仙人が描かれています。みんなそれを見てるんです。ところが、この坊やは我々の顔を見ているんですね、こんなことはないんですね。テレビカメラを見ちゃいかんというのがありますが、撮影されるときにね、まさしくこの坊やはよそ見をしてカメラを見ているわけです。こんなことをやるのは雪村以外にないだろうなというふうに思うんですが。

はい。〔スライド〕以天宗清像、雪村筆

雪村も、実は以天宗清というお坊さんの肖像を描いてるんですね、これははっきりしております。やっぱりそれなりに何か肖像画を描くというようなことも共通しているんで非常におもしろいなと思うんですが。

はい、次をお願いします。〔スライド〕雪村自画像（大和文華館）

最後に、肖像画をちょっと。これは雪村なんです。今お見せしてきた雪村の自画像。これもアップにして見ていくとおもしろいんですが、多少悪い言い方をすると、狂信的な雰

囲気を持ってぐらい個性的なんですね。

画風をよくあらわしているんじゃないかと思うんです。

〔スライド〕明兆自画像（東福寺）

それから、これは今回はお見せしませんでした。雪舟以前の人物画家として非常に数多くの作品を残した兆殿司、明兆ですね、明兆の自画像の写しなんです。これを見ると、この人っていうのはもうまじめ一方で、気弱でというのがもろに出ておりますね。おとなしくって、本当に気が弱い。

はい。〔スライド〕雪舟自画像、探幽筆（京都国立博物館）

雪舟 71 歳の絵なんですけれども、これが探幽が写した。常栄寺のも同じ系統のオリジナルから写したものだと思います。自画像を描くということも画家にとってそんなに日本の場合、数のあることじゃないんですが、この絵を見ておきますと、やっぱり雪村のようなはね返るような強烈なところもなければ、明兆のような気弱なところもなければ、非常に落ちついた、スケールの大きい落ちつきというのが感じられるようですね。

スライドはこれだけだと思います。

そんなことで、ちょっと、何かあいまいなままで終わってしまって、時間が物すごく超過いたしまして申しわけありません。

最後に、雪舟という人は旅を好んで、旅を通じて人とのふれあいということを非常に大事にした人であるということが作品の上からおわかりいただけますし、あれだけのたくさん的人物画を描くということは、彼がヒューマニスティックな、人間というものに非常に興味を持っていたからだと思います。それが本筋だと思うんですが、ここで皆様方が、5つの市町が雪舟という画人にあやかって、ゆかりのある皆様方が協力して町を、世の中を興していくということのきっかけにされようとする意義は、雪舟が今ごらんいただいたように人物というものに、非常に人間というものに興味を持って接していたということを考えますと、これは非常にタイムリーなというか、よくでき過ぎた話じゃないかなと思うほどいい企画であるように私は思っております。ぜひ、この雪舟サミット、あるいは子どもフォーラムという子どもを中心にしたこの会合、あるいは会というものをぜひ育てていただきたきたいというふうになんか思っております。

どうも、本当に大変時間超過いたしまして申しわけありませんでした。御静聴ありがとうございました。（拍手）

司会

金澤先生、貴重なお話、本当にありがとうございました。

どうぞ、皆様、いま一度金澤先生に暖かい拍手をお願いいたします。ありがとうございました。（拍手）

皆様、感銘深くお聞き取りいただき、ありがとうございました。

雪舟さんの研究におきまして日本で第一人者であられます金澤先生の熱のこもったお話をお聞きし、雪舟さんがより身近に感じられるようになったのではないかと思います。

さて、それでは交流会議の準備の都合により、いましばらくの間休憩とさせていただきます。